

---

# ドラクエティータイム

たけにゃん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ドラクエティータイム

### 【Nコード】

N7345W

### 【作者名】

たけにゃん

### 【あらすじ】

ドラクエ3とけいおんのコラボレーション。

勇者となった梓は仲間達を巻き込んで、大冒険へと旅立っていく魔王を倒し、元の世界に戻るために…。

## <キャラ紹介>（前書き）

今回のこの小説はWi-i版ドラクエ1・2・3発売記念的なもので、けいおんとのコラボで書いてみました。

作中でも説明しているルールによりゲームの進行と共に小説も更新していきます。

故に、この先どんな状況になるか作者の私自身もわかりませんが、どうかよろしくです

## < キャラ紹介 >

### 中野 梓

桜が丘女子高等学校三年生でけいおん部所属

この物語で主人公に抜擢された

当初は真面目な部分が強かったが、先輩達と共に過ごし楽しむことができるようになった

この物語ではいきなりドラクエ3の世界にやって来て、戸惑いながらも仲間達と共にこの世界の平和と元の世界へ戻る事を目標に進んでいく

この世界での役職は【勇者】

### 平沢 唯

桜が丘女子高等学校卒業生。

同級生の澪・律・紬に梓を加えて、放課後ティータイムとして活動を行っていた。

練習よりもお茶の時間が好きではあるが、実際にはギターの知識ゼロからかなりの上達をしておりそれなりに練習を重ねていた。

梓によりドラクエ3の世界に召喚される

この世界での役職は【遊び人】

### 秋山 澪

桜が丘女子高等学校卒業生。

律に強引な形でけいおん部に入る事になるが、結果自身の欠点であった恥ずかしがり屋な部分等を克服できている

梓と共に真面目にやらない唯や律を正す役目を持っている

ちなみに左利き

この世界での役職は【魔法使い】



## 第1話：勇者誕生

いつもと変わらない日常…。

先輩達も卒業し、憂や純がけいおん部に入ってくれて新たな目標に向かつて進んでいこうとした矢先…。

誰も予想していない出来事が…起きてしまったのだ。

梓「…んっ…」

いつものように起床する私・中野梓。

王様「勇者梓よ、居眠りをしている場合ではないぞ」

梓「はい？」

聞きなれない声に眠っていた私の頭は、一気に冴えていった。

王様から色々な話をされるが、梓にとっては今のこの状況を理解することの方が先だった。

旅立つ資金と道具を貰い、足早にこの場を離れ外へ出る梓。

梓「…城…それにこの街…どう言うこと？」

とはいえ自分の記憶の中には身に覚えがないもののこの街の事も入っていて、それが余計に梓を混乱させていた。

梓「…とりあえず話を聞いてみればいいのかな…」

梓は街の人達と話しながら、どうしてこうなったのか過去を思い出してみることにした。

昨日までは至って普通だった。

学校でも帰宅してからも…。

梓「そう言えば純がゲームの話をしていたような…」

しかし、特に原因が思い出せず考えても無駄なので教えてもらったルイーダの酒場へと向かう梓。

梓「ここで仲間を…そうですね…私一人だけじゃ寂しいですし…ここは…」

何やら黒いものが梓に一瞬見えた気がした周りの客だったが、そこは気のせいとしてスルーしていた。

ルイーダ「いらっしやい。貴方が勇者・梓ね。ここのシステムは好きに使っていいわよ」

そう説明する店主のルイーダ。

梓「じゃあ…」

そして、梓は慣れたような手つき…ではないが作業を進めていった。

………

1時間後…ルイーダの酒場の別室…。

律「さて、梓。この状況を最初から全て説明してもらいましょうか」

梓「律先輩…落ち着いて…」

唯「この格好面白いね」

そんな中で、いつもの調子で楽しんでいる人物は平沢唯。

和「そうね、私としても説明してほしいわ」

純「そうだ！ここってゲームの世界だよ…確かドラゴンクエスト3」

純の言葉を聞いて梓は

梓「そうだった。純がこのゲームの話をしている…じゃあ、純が原因なんじゃない」

憂「とりあえず落ち着いて状況を確認しよう」

憂の言葉に全員冷静になり、梓から話を聞くことにした。

漣「何だか、大変な事になったな」

そう呟いたのは秋山漣だった。

純「でも、これが本当にゲームの世界だとしたら…」

憂「純ちゃん、顔がにやけてるよ…」

唯「ところでさ、あずにゃん」

と、急に梓に話しかけてきた唯。

梓「なんですか？唯先輩」

唯「私達の格好それぞれ違うけど…」

その事を尋ねる唯。

さわ子「その説明なら私がしてあげるわよ！」

全員「！？」

いきなり現れたけいおん部の顧問・山中さわ子に驚くメンバー達。

律「こんな時にまで神出鬼没かよっ」

唯「でも、どうしたの？さわちゃん」

さわ子「どうやら私は貴方達のナビゲーター役みたいね…このゲームにはこういう役はないんだけど、みんなもパニックになっているだろうからって事かしら」

そう考えるさわ子。

紬「それで…」

さわ子「さっきの唯ちゃんの質問は梓ちゃんが決めた職業に基づいた服装なの。イメージ的なものが多いんだけどね」

漣「私のは…」

梓「漣先輩は魔法使いですね」

さわ子「説明が長くなるからそれぞれの職業紹介は後にして…この小説の作者さんがこのゲームはクリアしてないけど前にやった事あるから、いつもとは違うプレイングにしようとして考えた案を…」

律「嫌な予感しかしねえぞ」

紬「でも、みんなと一緒に何かやるのって楽しそう」

少しウキウキ気分の紬。

さわ子「説明を続けるわよ。まず、パーティーは最大で四人。でも、梓ちゃんは勇者で外せないから加えられるのは三人ね」

唯「なら、私があずにゃんに同行しちゃうよ!」

張り切ってそう言い放つ唯。

梓「余計な危険が増えそうですね」

唯「あずにゃんひどい!?!」

漣「それは置いといて…どうやってその三人を…」

さわ子「えっと…作者の説明によるとランダムで三人を選び次の目的地まで進む事…ダンジョン攻略の場合は攻略後、街に戻るまで…らしいわよ」

純「じゃあ、梓以外のメンバーがごちゃまぜで毎回三人選ばれて旅をするってわけですね」

そう告げる純。

憂（お姉ちゃんと一緒になれればいいかな…）

ふとそんな事を考えている憂。

さわ子「まあ、全員知ってる人達同士なんだしギクシャクする事はないでしょ。また何かあれば出てくると思うからよろしくね」

そう言い残し、さわ子はリーダーの酒場から消えていったのだった。

## 第2話・出発はデコボコチーム!? (前書き)

最初のランダム選出…どんな内容かは本編を読んでみてください

## 第2話：出発はデコボコチーム！？

そんな訳で、最初の目的地レーベへと向かうメンバーをランダム選出した。

梓「…」

なぜか無言になる梓。

紬「いきなり最初から選ばれるなんて、よろしくね梓ちゃん」

唯「よし、張り切っちゃうぞ」

純「ガンバロ、梓」

梓「ムギ先輩はともかく…」

漣「まあ、そう言う結果になったのは仕方ない…」

律「漣の場合はモンスターと戦いたくないだけだろ」

和「いろいろ大変だと思うけど、唯の事よろしくね」

そんな訳で、他の仲間達をリーダーの酒場に残し梓達は準備を整えるとアリアハンを出発していった。

### 【目的地・レーベ】

出発メンバー（レベルは出発時のもの）

梓：勇者 LV1

紬：戦士　L V 1

唯：遊び人　L V 1

純：盗賊　L V 1

紬「私、ゲームとかやらないけどどうしたらいいのかしら」

純「R P G・・・つまり、ロールプレイングゲームはキャラのレベルをあげながら進んでいくんですよ」

梓「まずはアリアハンの周辺で強くなっていきましょう」

そんなわけでいつもの調子でやってみたものの・・・大変なことになった。

梓「装備配分間違えた!？」

戦士である紬の防御力が一番低いと言う事態を招いていた。

更に、攻撃力の低い唯と純。

梓自身もレベルアップが遅く、何度も自宅に通っては休む日々が続いた。

純「梓、そろそろ橋越えて先行こう。装備もレベルもいい頃だし」

純の提案もあり、居残っているメンバーの事もあり梓たちは橋を渡り北にあるレーベを目指した。

だが、しかし遊び人・唯が普通に目的地を目指す事は…なかった。

唯「草むらの先に何かあるよ」

そう言いながら足を踏み入れるといなくなってしまった唯。

梓「唯先輩!？」

紬「二人とも追いかけましょう」

梓と純の手を取ってその先へ向かう紬。

と、ひらけた場所に到達した四人。

唯「こつちに地下の入口があるよ」

純「…また勝手に進み始めましたよ…」

呆れながら三人は唯の後を追って進んでいく。

道中敵と戦っていると、洞窟からキレイな場所へとやって来ていた。

梓「太陽の光…洞窟を抜けたんですね」

紬「あれを見て…私達が出発したアリアハンよね」

紬が示す方を見ると、確かにアリアハンの城と城下町が見えていた。

梓「外に出て良く見たらここはあの小島にあった塔ですね」

唯「よしっ、今度はこの塔を探検するんだね!」

駆け出して行こうとした唯であつたが、すぐさま梓が引きとめた。

梓「さっきの洞窟内でも今まで出なかったモンスターがいました。手傷も負っていますし、回復手段も薬草しかないんですからここは戻りましょう。それに私達が受けた目的はレーベへの到着なんですから」

そう唯に言い聞かせる梓。

紬「そうね、装備も充実して入るけど完璧じゃないし」

純「さすがの唯先輩でも今の状態の梓にワガママは通りませんね」

そんな訳で、一度アリアハンへ戻り休息を取った四人は一直線にレーベに入っていたのだった。

紬「アリアハンと比べると自然が多い所ね」

唯「あずにゃん、ここならゆつくり探索してもいい？」

梓「構いませんけど私達はチームなんですから団体行動でいきますよ」

色々言いながら歩いていく三人を後ろから眺めている紬。

紬（一体誰がこんな事をしてきたのか…でも、梓ちゃんを勇者としてリーダーにさせたのは正解かもしれないわね…アリアハンにいるみんなと協力して…必ず元の世界に戻るから）

梓「ムギ先輩、どうしたんですか？」

唯「早く行こう」

紬「はい…ふふっ」

笑顔を見せながら梓達の側に駆け寄る紬。

そして、梓達はゆっくりとレーベの中を探索していくのであった。

#### 目的達成

梓 LV3 装備品：銅の剣・旅人の服・皮の盾

紬 LV4 装備品：棍棒・旅人の服・皮の盾

唯 LV5 装備品：銅の剣・布の服

純 LV5 装備品：ひのきの棒・旅人の服

#### 報告

本を読んで純の性格が【ふつう】から【ちからじまん】に変わりました。

## 第2話・出発はデコボコチーム！？（後書き）

普通のプレイでは僧侶や魔法使いが最初にいるはず（自分がかつてFCやGBCでやった時もそうでしたが）なのですが、やはり回復役がいなくてきついのはどのRPGでも同じですね  
次もまたランダム選出をやっていきますので…  
では…

### 第3話：ナジミの塔の攻略

梓「疲れました…」

アリアハンへと戻って来て自宅にてぐったりしていた梓。

紬「とりあえず酒場の方へ向かいましょ。漣ちゃん達も待ってるわ」

そんな訳で酒場へと入ると、目の前にさわ子がいて四人とも固まっていた。

漣「おかえりって…まあ、びっくりするよな…」

さわ子「調べ回る時間削減のために私が来てあげてるんじゃない…次の目的地の発表よ」

梓「普通に現れてください、って言うかお酒とか飲んでないですよね」

さわ子「失礼しちゃうわね…まあ、それはいいとして…次の目的地は塔よ…もう大体分かると思うけど」

憂「西の方角にあるあの塔ですよね」

唯「それなら私達一足先に入っただよ」

律「なんだとっ!?!」

大げさに驚いてみせる律。

梓「でも、話だと塔へ行く道はあんな所にはなかったはずなのに」

さわ子「まあ、どこからでもいいからちゃちゃっと入って目的達成しなさい。今回はダンジョンの攻略だから到着するだけでなくそこでの役目を果たして戻ってくるまでが目標だから」

梓「じゃあ、またメンバー選びですね…」

また不安になりながら運を天に任せる梓。

そして…。

#### 【目的地・ナジミの塔攻略】

出発メンバー（レベルは出発時のもの）

梓：勇者   LV3

律：武闘家   LV1

和：僧侶   LV1

純：盗賊   LV5

憂「また純ちゃんが…」

律「よし、ようやく私の出番か」

漣「…」

和「私は僧侶の役目だから、しっかりみんなをサポートしないといけないわね」

梓「初めてのメンバーもいますから、またレベル上げと装備充実さ

せてから…」

そう決める梓。

それからしばらくして…。

律「結構強くなったよな」

和「そうね…いつの間にかにね」

初参加の二人はとりあえず満足そうにしていた。

純「梓！」

梓「うん、それじゃナジミの塔へ…」

律「そうだ、入口二つあるんだろ？唯なら両方探索するはずだ」

和「二人は北の入口から入ったのよね」

純「確かに何か落ちてるかもしれないし…どうする？梓」

梓「私達も強くなりましたし、何かあればレーベやアリアハンに戻って回復もできます。ここは積極的に行きましょう」

そう判断し、一行は西側にある入口を目指す事にした。

律「やはり、お宝があったか…」

和「敵もフィールドのより強いのが出てきてるから長居は無用ね」

そして、敵を倒しながら進軍していく一行。

すると、以前梓達がやってきた塔の一階部分へ到達した。

純「こんな風に繋がっていたんですね」

律「梓、この間はある側の通路見たのか？」

塔に入ってすぐ右側の通路を示す律。

梓「いえ、この間はこの塔攻略が目的ではなかったのですぐに出ましたけど…」

律「よし、行くぞ！」

と、純の手を引っ張り駆け出して行った律。

和「ちよっ…律!？」

律「私達の素早さなら敵と出会っても大丈夫だよ」

梓「行っちゃいましたね…私達は下手に動かずに二人を待ちましよう」

それからしばらくして律と純が戻ってきた。

純「あれが盗賊の鍵で開く扉のようです…ここで鍵を手に入れば進めそうですね」

和「じゃあ、再出発しましょう」

そんな訳で塔攻略を再開したのはよかったが、初のダンジョン攻略は中々難しかった。

純「ちよっ…と…休もうよ…」

梓「純、体力無さすぎ」

律「まあ、敵と戦いながらフロアを行ったり来たり…階段登って行き止まりで戻ったりとか…私だってきついよ」

和「でも、フロアのほとんどを把握しながら登って来てるからそろそろ頂上に着くはずよ。頑張りましょう」

元・生徒会長の言葉は純の精神力を回復させていった。

純「でも、どうせだったら…」

梓「ここに零先輩はいないからすぐに出発しましょう」

純「うぐっ…」

律「はいはい、行くぞ」

互いにフォローし合いながら、梓達はようやく塔の頂上にある部屋にたどり着いた。

そして、そこにいた人物から見事【盗賊の鍵】の入手に成功した。

純「やった！」

和「気は抜かないで。私達の目的は鍵を手に入れて戻る事なんだから」

律「一応壁がない所から飛び降りれるらしいけど…」

純「……いやいや…普通に危険ですよ、これ」

梓「でもそれは設定上問題ないはずですから…怖いですけど…行きましょう」

意を決して飛び降りた梓。

そして、梓に続く三人。

和「何とかなるものね…登るのに時間かかったのに帰りは一瞬で塔の外…」

純「生きた心地がしなかったけど…とりあえずあの扉の先を調べましょう」

そんな訳で、早速鍵を使い扉を開けその先へ進んだ。

梓「あれ？」

そして、階段を抜けた先の光景を見て驚いた梓達。

純「ここ、牢屋？」

梓「牢屋にいる人見た事ある…って言うかここ…アリアハンのお城の牢屋!？」

一行はすぐさまそこから外へと飛び出した。

和「外の洞窟が塔に、そして塔がお城に繋がっていたのね」

律「城に何かあれば逃げ出せるようにってやつか？」

純「早く漣先輩に…いえ、みなさんの元に帰りたいですけど…」

和「そうね、アリアハンで鍵を使える所の探索まで私達の役目」

そして、一行は鍵を使い更なる人物達から話を聞いた後ルイーダの酒場へと戻ってきたのだった。

憂「みんな、お帰り」

梓「何かいい匂いが…」

漣「せっかくだからルイーダさんに頼んで、台所を貸してもらって夜御飯を…」

唯「早く早く、お腹ぺこぺこだよ」

梓「唯先輩は今回働いてないです、それにご飯を作る手伝いもしないはずですからご飯はお預けです」

唯「あずにゃん、ひどい!？」

律「とにかくご飯食べてゆっくり休もうぜ。また明日には次のクエ  
ストがあるんだしな」

純「梓は勇者だからずっと外に出てなきゃいけないんだし」

そして、その日の酒場は楽しげな声が夜遅くまで続いていたのであ  
った。

#### 目的達成

梓 LV6 装備品：銅の剣・皮の鎧・皮の盾

純 LV8 装備品：ブロンズナイフ・旅人の服

律 LV6 装備品：稽古着

和 LV7 装備品：銅の剣・皮の鎧・皮の帽子

#### 報告

本を読んで律の性格が【なまけもの】から【おてんば】に変わりました。

## 第4話：いざ、新大陸へ

さわ子「初ダンジョンクリアおめでとう」

翌朝、いきなり登場するさわ子だがすでに慣れたのか誰もリアクションを取る事はなかった。

梓「それでは次の指示をお願いします」

さわ子「みんなひどい!？」

### 【目的地・ロマリア】

出発メンバー（レベルは出発時のもの）

梓：勇者   LV6

純：盗賊   LV8

唯：遊び人   LV5

澪：魔法使い   LV1

唯「また登場だよ」

澪（やっと一緒になれた・・・）

憂「お姉ちゃん・・・私嫌われてるのかな・・・」

梓「う、憂・・・って純、人をストーカーしないで憂に替わればいいのに」

純「何か酷く言われてるけど、ランダムで選ばれたんだから文句言えないじゃない」

少し頬を膨らませながらそう言う純。

さわ子「はいはい、二人が言い争っている間に澪ちゃん達に今回の目的伝えておいたわよ。澪ちゃんはまだレベル1なんだから気を抜いてたら・・・」

純「澪先輩は私が守りますから！」

唯「じゃあ、あずにゃんは私を守つ・・・」

梓「レベルも順調なんですから、自分の身は自分で守ってください」

紬「今回のチームも大変そうね」

微笑みながらそう言う紬。

梓「それじゃ、澪先輩のレベルをあげながらレベル1に向かいましよう」

唯「新大陸に行くんじゃないの？」

律「さわちゃんの話の最後の部分しか聞いてなかったな・・・」

梓「準備があるんです。ほら、行きましょう」

唯「あゝ待つて・・・もう少しお菓・・・」

梓に引きずられながら姿が見えなくなった唯。

純「漣先輩、私達も」

漣「うん、頑張る」

小さく意気込む漣。

そして、一行はレーベへ向かいながら漣のレベル上げを頑張っていた。

唯「漣ちゃんの呪文強いね」

純「魔法使いなんだから呪文が強いのは当たり前なんだけど…」

梓「小さなメダル五枚で交換したその鞭の攻撃力が高いんですよ…魔法使いなのに普通に打撃戦出来てるし」

漣「そのおかげで順調にレベルも上がってるよ」

かなり喜んでいる様子の漣。

梓「それに比べて戦闘中に寝ないで下さい、唯先輩」

純「梓：怒る気持ちはわかるけどさ…唯先輩を遊び人にしたのは梓だからね…」

唯「そうだよあずにゃん。この責任はきっちり取らないと」

梓「むむっ…とにかくレベルを上げながらレーベでやる事やるです」

と、一人レーベに入っていつてしまった梓。

漣「仕方ないレベル上げを切り上げて私達も…」

そして、梓達は盗賊の鍵を使い魔法のたまを入手する所まで到達した。

唯「さわちゃんの話だと新大陸に行くのに必要なんだよね」

漣「次に向かうダンジョンで使うんだ。敵も強いから装備を整えよう。レベル上げしている間にゴールドも溜まったし」

どんなものでも入る道具袋も不思議だが、たくさんのゴールドを持ち出来るのも不思議である。

純「大体の装備はオツケーだね…私と梓の武器も鎖鎌になったし」

唯「どんな敵でもへっちゃらだね」

梓「唯先輩、油断しないでください。敵の数はこっちより多い時もあるんです…漣先輩の武器や呪文があるとはいえ…」

唯にどんどん言っていく梓。

漣「梓、唯だってもうわかってるさ。最初は戸惑っていたけど…やらないや元の世界に帰れないんだ…待ってるみんなとも力を合わせて乗り切る…」

純「はい、漣先輩」

梓「そうですね…でも、用心には用心でもう少し稼いで行きま

しょう」

勇者である梓の判断により、今しばらくレーベ周辺でのうつろつきを続ける一行。

そして、回復アイテム等も充実しつつに新大陸へと向かうこととなったのであった。

## 第5話：ギリギリのパーティーバトル

魔法のたまを携えてやってきた二つ目のダンジョン。

いざないの洞窟。

唯「何だか不気味だねえ」

純「洞窟のダンジョンなんてそういうものだと思いますよ」

漣「…」

梓「漣先輩…もう少し強くなってから入りますか？不安なら…」

漣を心配してそう言う梓。

漣「ごめん梓。さっきあんな事言っておいて立ち止まってなんていられないだろ」

唯「大丈夫だよあずにゃん。この四人なら乗り切れるよ」

梓（遊び人の唯先輩の行動が予測不可能すぎてそれが怖いんですけど…）

とりあえず先へ進むと、壁により道がふさがっている個所にやってきた。

漣「これで魔法のたまを…」

魔法のたまをセットして…爆発と共に壁は崩壊し奥に通路が現れた。

唯「このたまって他にないのかな？」

梓「？」

唯「モンスターに言えば効果抜群だよ」

純「唯先輩…確かにそうかもしれませんが…ゲームバランスが崩壊しますよ」

いつもと変わらない様子で、いざないの洞窟を歩いていく四人。

梓「敵も手強いので気をつけてください…えっと、バブルスライムとアルミラージと言うモンスターは注意が必要です」

唯「それってどういうの？」

梓「先生が持ってきたモンスター図鑑によると…こんなモンスターで…」

漣「…梓」

モンスター図鑑を見た直後、漣の動きが止まった。

唯「漣ちゃん？」

漣「向こうにいるの…そのモンスターじゃ…」

奥の通路からやって来ているモンスターの群れ。

それはバブルスライムとアルミラージ数体ずつの群れであった。

唯「これって…ヤバいかな」

純「攻撃力の高い私と梓が先頭で上手く喰いとめれば…」

と、その時

澪「みんな、伏せて！」

いつもとは違う澪の放つ大きな声。

唯「澪ちゃ…」

そう言い切る前に、梓により無理やり伏せさせられた唯。

澪「これでも…ギラッ！」

かざした手から放たれた閃熱の呪文。

その呪文は襲いかかってきたバブルスライムをあっさりと撃退させた。

唯「凄い、澪ちゃん」

梓「純！唯先輩！」

二人の名前を呼ぶと同時に起き上がり駆け出していた梓。

それに続く純と唯。

そして…大きなダメージもなく無事にこの戦闘を乗り切る事が出来たのであった。

梓「他にも危険なモンスターもいます。すぐにここを抜けましょう」

足早にいざないの洞窟を進んでいく一行。

しかし、最初のダンジョンであったナジミの塔とは違い薄暗い洞窟の中では地面に穴があって進めなかったりとより迷うような構造になっていた。

梓「ホイミ…」

今回は僧侶の和が参戦していないため、梓がみんなの治療役を行っていた。

純「梓、精神力は大丈夫？」

梓「呪文の攻撃は澪先輩がやってくれてるから、何とかMPは回復にまわせてるけど…」

まだ先にあるであろう出口。

確実にそこに向かって進んでいるのだが、徐々に減るHPとMPが段々焦りをもたらしていた。

澪「私もいつまで呪文を使い続けられるか…」

純「結構進んだから、戻るのも大変だよね…何とか抜きたいけど」

梓「進もう…」

その場で喋っていてもモンスターがやってくるだけなので、急いで進む一行。

と、階段を進んだ先で今までと違う雰囲気の通路が見えてきた。

純「道が三つに分かれて…正面の道の先には扉が見える」

漣「三つ…正解は一つみたいな感じかな」

唯「こう言うのは直感だよ！」

と、真ん中の道へ駆け出して行った唯。

梓「…こう言う時は唯先輩の明るさが頼もしく思えます…」

漣「まあ、唯は考えて行動するタイプじゃないしな」

そう言う漣。

しかしながら、二つの道を進んでどちらも行き止まりであり少し疲労がたまった一行。

そして、最後の一つ。

梓「きつと出口です。突っ切りましょう」

疲れてはいるが、この先が出口であると信じて力を振り絞り先に進む。

漣「!？」

そして、その先にある渦巻いている泉を見つけた漣達。

純「これが集めた情報にあった旅の泉？」

唯「入って大丈夫だね」

梓「後ろからモンスターも来ているみたいですし、行きましょう」

と、勇者らしく一番手で飛びこんでいった梓。

すると、その場から梓の姿が消えた。

そして…。

その先で四人が見たのは、城と城下町の光景なのであった。

純「あれが…ロマリア…」

そこからの行動は速く、あっさりとロマリアの城下町へと到着したのであった。

純「まずは一休み…」

純にいわれるまでもなく、宿屋にて一晩休むことにした一行。

唯「ねえねえ、この街の地下にモンスター闘技場があったよ…何か面白そうだよ」

純「いつの間にそんなのを見つけてくるんですか…唯先輩」

梓「遊ぶのは後です！ロマリアを探索して…城なら王様に顔を見せてこないと…私は勇者ですし」

そんな訳で、渋々な唯と共にロマリアの街と城を探索していった。

そして、探索後唯の強い希望でモンスター闘技場に足を運んだ梓達。

唯「向ここの予想屋さんだと次に当たるのは大がらすだって！」

純「えっ、でもこのメンバーだと…」

次の対戦はいつかくさぎVS大がらすVSバブルスライムであった。

梓「零先輩、どうしましょう」

零「私が決めていいなら…バブルスライムかな」

唯「予想屋さんは…」

純「まずないと思うから」

純にそう言われ、ちょっとショックな唯。

しかし、零の考えは的中し僅かながら手持ちゴールドを増やすこと

に成功した。

唯「やったね澪ちゃん。じゃあ、もう一回…」

また賭けようとする唯を一喝して止めた梓。

そして、ロマリアの王様にあつた後ルーラで仲間の待つアリアハンへと戻っていったのであつた。

#### 目的達成

梓 LV9 装備品：鎖鎌・皮の鎧・青銅の盾・皮の帽子・くじけぬ心

純 LV10 装備品：鎖鎌・皮の鎧・皮の盾・皮の帽子

唯 LV9 装備品：鎖鎌・亀の甲羅・皮の盾・ターバン

澪 LV8 装備品：棘の鞭・亀の甲羅・皮の帽子

#### 報告

本を読んで澪の性格が【きれもの】に変わりました。

本を読んで唯の性格が【ぬけめがない】に変わりました。

くじけぬ心を装備して梓の性格が【くろくにん】に変わりました。

## 第6話：カンダタ退治のその前に…

憂「みなさん、お疲れ様です」

と、出迎えてくれた憂。

唯「ごめんね憂。退屈な思いさせちゃって」

梓「うん、本当に申し訳なく思ってます」

純「何とかしてあげたいんだけどね…作者の力でもどうしようもないし」

さわ子「新大陸に進出した所で、また新たな情報を得たみたいね」

漣「金の冠が盗まれたとか…」

梓「次はその盗賊退治ですか？」

さわ子「その前に、この周辺のモンスターになれておいた方がいいでしょ。漣ちゃんがいなかったらいざないの洞窟だって危なかったんだし」

梓「なんで私達の旅の様子をよく知っているのかは謎ですが…確かにそうですね」

和「話をまとめて考えると、その塔に行く前にあるこのカザーブつて所が次の目的地になるわけね」

道中で手に入れたマップを見ながらそう告げる和。

さわ子「じゃあ、カザーブに向かうメンバーを選出するわよ」

梓「…憂…」

心配そうな顔でそう呟く梓。

【目的地・カザーブ】

出発メンバー（レベルは出発時のもの）

梓：勇者 Lv9

唯：遊び人 Lv9

律：武闘家 Lv6

澪：魔法使い Lv8

梓「やっと純が外れたと思ったら…」

唯「何で私の方見てるの、あずにゃん」

紬「…憂ちゃんがいなくなっちゃったわね…」

律「さわちゃん！何とかならないのか」

さわ子「こう言うルールになっている以上はね…でも、その代わり  
しっかり武具を集めてくればレベル1でもそこそこ強くなれるわけ  
だし」

唯「憂がいつでも冒険に出れるように頑張ろう」

梓「憂…」

漣「律が入るのは久しぶりだし、新大陸からのスタートは危ないな」

律「今の装備が稽古着だけだしな…」

そんな訳で一行はレーベ周辺にて、再びレベル上げとゴールド稼ぎを行い始めた。

しばらくして…。

律「それにしても勇者ってレベルアップ遅いんだな」

梓「律先輩にも追いつかれそうですしね…でも、一応万能に動けるので良しは良しなんですが…」

漣「武具も買うものなくてゴールドもたまる一方だし、そろそろ力ザーブに向かおうか？」

そう提案した漣。

唯「カザーブに行けば新しい武具が見つかるかもしれないしね」

梓「唯先輩の意見もたまには一理ありますね」

唯「何気にひどいよ、あずにゃん」

律「じゃあ、梓…掛け声頼むぞ」

いきなり話を振られて驚いた表情を見せる梓。

梓「掛け声って…初めて知りましたよ」

律「いや、単に話を振ってみただけだ」

漣「でも、私達はチームだし…勢いをつける為にもやるのもいいかもな」

唯「いつになく漣ちゃんが積極的だね」

梓「…わかりました…では、勇者一行…次の目的に向かって…」

梓・唯・律・漣「しゅっぱーっ!!」

まだまだ楽に倒せるとはいえないものの、モンスター達を協力して倒して進む一行。

漣「新呪文…イオ!」

魔法使いとして敵を一掃できる力を持つ漣が、後方から支援しつつ前衛でその力を振るう梓達。

そして、あたりは暗くなり…。

律「あつちに見えるの…」

唯「カザーブだね!」

喜んで駆け出そうとする唯。

しかし、その進路を塞ぐかのように次なるモンスターが出現した。

漣「こうもり…」

梓「いえ、あれはこうもり男です。動きが素早いので気をつけ…」

梓がそんな説明をしている間に、行動を開始し始めたこうもり男の群れ。

漣「私が何とか…って…」

呪文を唱えようとする漣に迫る一匹のこうもり男。

律「させるかつ！」

と、横から律が拳でこうもり男を弾き飛ばした。

律「広範囲系はいいから、単体系の呪文で確実に仕留めてくれ」

漣「ありがとう律。うん、やるよ」

と、冷気が漣の掌に集まる。

漣「ヒヤド！」

漣の放った氷系の呪文は、こうもり男を一体氷漬けにさせた。

梓「ありがとうございます、漣先輩」

そして、追撃の剣を放ち撃破する梓。

律「またモンスターに寄ってこられたらまずい。倒して進路を確保しながらカザーブに入るぞ」

唯「了解！」

こうもり男達を撃破しながら、カザーブへと向かう一行。

回復の主な手は梓だけであつたが、強くなった一行はより多くの戦闘をこなせるようになっていた。

漣「最後の一体、ヒヤド！」

漣が残り一体となつたこうもり男を撃破し、その勢いのままカザーブへと到達したのであつた。

律「レベル上げの時もそうだったけど、昼夜が違つと敵も違つてきて大変だな」

梓「昼間の敵も厄介なのがなくて大変ですけどね…とりあえず宿で休みましょう。漣先輩の精神力もギリギリでしょうし」

そんな訳で新たな地でゆつくりと休む梓達。

翌朝。

お決まりの新天地の探索。

漣「唯の予測通りに武具の店もあつたな」

律「梓のルーラにここも登録されたし、カザーブも見て回つたし…」

あそこ行ってみようぜ」

律の言うあそこは…道中にあつたすぐろく場の事であつた。

唯「確かルールは一人でやるんだよね…私達だと代表のあずにゃん？」

梓「一人で進むのは心細いですが、先輩達が見守っているのなら…」

そんな訳で、一行はアリアハンに帰る前にすぐろく場へと足を運んだ。

律「カザーブに入る前にちょっと見てきたけど、面白そうだったからな」

漣「ロマリアのモンスター闘技場もそうだけど、あまりのめり込むと痛い目を見るぞ」

仲間達にそう忠告する漣。

唯「大丈夫だよ、あずにゃんならやってくれる」

唯達の期待を胸にすぐろくに挑む梓。

しかしながら、一回目はゴール前まで来るもピツタシに到着しなければならずその途中で落とし穴に落ちてしまった。

二回目は何とか粘るものの、最後までゴールのマスは踏めずサイコロの数がなくなり終了となった。

そして、すぐろくを行う為の券は残り一枚。

先程カザーブを探索して見つけたものである。

唯「頑張つて、あずにゃん」

梓「ラストチャンス、行きます」

最後のトライの一步を踏み出した梓。

律「まあ、何だ…誰にでも失敗はあるって」

梓「…」

完全に落ち込みモードに入ってしまった梓。

梓「漣ちゃん、何とかして〜」

漣「いくら私でも…」

最後のチャンスにかけた梓。

しかし、一発目…止まった森のマス調べ落とし穴に落ちてしまい…。

漣「梓、ムギ達が待つてる…アリアハンへ戻ろっ」

梓「そうですね…魔王を倒す辛さに比べたら…すぐろく場で一度もゴール出来なかった私の惨めさなんて…」

律「そうとうきちゃってるな…これ」

そう思いつつ、梓のルーラでアリアハンへと戻り目的の達成を伝えるのであった。

#### 目的達成

梓 LV11 装備品：鉄の槍・鉄の鎧・青銅の盾・木の帽子・

くじけぬ心

律 LV10 装備品：鉄の爪・武闘着・お鍋のフタ

唯 LV12 装備品：鉄の槍・亀の甲羅・皮の盾・ターバン

澪 LV11 装備品：ブーメラン・亀の甲羅・お鍋のフタ・毛

皮のフード・うさぎのしっぽ

第6話：カンダタ退治のその前に…（後書き）

すぐろく場は本当にゴールできなかった…これってキャラクターの運のよさも関係しているのだろうか…だとすると一番運のよさの低い梓ではゴール出来ないのか…

## 第7話：ついにボス戦：VSカンダタ

さわ子「このルールの辛い所は、レベル上げが大変って事ね」

紬「先生、いきなりそんな事言われても…」

梓「私は常にメンバーですからいいですけど、先輩達や憂・純はドキドキなんですよ」

梓がそう言うのも無理はなかった。

次に選ばれると言う事は、初めてのボス戦でありカンダタと戦うことになるかもしれないのである。

漣「話し合いで解決とか出来ないのかな」

律「決まっているルールの上を進むこのゲームの世界でそれは期待しない方がいいぞ」

唯「りっちゃんも夢をぶち壊す人だよねきつと」

律「どういう意味だーっ」

いつものやり取りをいつものように沈めるさわ子。

そして、ドキドキのランダムメンバー選出が開始された。

【目的地・シャンパーニの塔、カンダタ退治】  
出発メンバー（レベルは出発時のもの）

梓：勇者    L V 1 1  
純：盗賊    L V 1 0  
唯：遊び人    L V 1 2  
和：僧侶    L V 7

梓「回復が出来る和先輩がいてくれて、とりあえずは安心なんですけど…」

和「選ばれたのだから仕方ないわ。力を合わせて乗り切りましょう」

純「私と和先輩は武具が最高のものじゃないのでレベル上げついでにまたゴールド貯めて武具を買わないといけませんね」

そんな訳で、またここからレベル・ゴールド上げのやり取りが始まってしまうのである。

ドラクエ内時間で…幾日か経って…。

またしても遊び人・平沢唯の発言から大変な冒険になっていくのである。

唯「結構強くなっだし、行けるところまで行ってみようよ」

梓「な、何を言い出すんですか唯先輩」

唯「だって地図見たら歩いて別の町に行けそうだよ！」

すでに行く態勢に入っている唯。

和「まちなさい唯。別の町に行くまで更に強いモンスターが出るの

よ。途中で力尽きたら・・・」

唯「でもでも、町にいけばいつでもルーラで行けるし・・・もっと強い武具もある。そうでしょあずにゃん」

梓「それは・・・そうですね・・・」

純「更に先にいるモンスターに勝てるようになれば私達の目的も楽にクリアできますよね」

梓「純！賛成派！？」

和「・・・こんなところでバラバラはまずいわ。私が回復でフォロ―するから行ってみましょうか」

梓「和先輩まで・・・わかりました・・・でも危険になったらすぐルーラで帰りますからね」

怒りながらも内心はワクワクしている様子の梓。

まずは北にあるノアニールを目指すことになった。

梓「すみません和先輩・・・ご迷惑を・・・」

和「構わないわよ。唯の事は私がよく知ってるし・・・やりたいことがやれて戦闘も上手くこなしているわ」

唯を見ながらそう告げる和。

そして、ノアニールに足を踏み入れた一行。

しかし、目の前の光景に驚きを隠せずにいた。

唯「寝ちゃってるね。みんなでお昼寝の時間かな」

純「流石にそれはないと・・・」

探索しつつ人々の様子を見ていくと、何処にいる人もみんな眠ってしまっていた。

唯「どうしようか」

とりあえず悩んでみる唯。

和「何か原因があると思うけど…もう少し調べてみましょう」

そして、ノアニールの外れの方で唯一一起きている人を発見した一行。

唯「エルフが関係してるんだね…エルフってモンスターかな」

梓「和先輩…」

和「私達の目的は盗賊退治。今はまだ深く関わらない方がいいわね…それに唯がもう次の事考えてるし」

唯「和ちゃんがそう言うなら次の探索地へ向かおう」

なぜか張り切っている唯。

梓「…って…」

一度ロマリアに戻り、唯が向かおうとした先を見て啞然となる梓。

純「橋を渡るんですね…」

唯「この先に街がある限り、私達は進んでいくのだよ」

和「こうなったら行く所まで行くしかなさそうね」

梓「和先輩まで唯先輩の勢いが…」

梓の心配をよそに、一行の快進撃は続いていった。

アッサラーム、そして砂漠のイシスまで到達してしまったのだ。

梓「一気にルーラで行ける所が増えましたね…道中は色々大変でしたが…」

少々溜め息混じりな梓。

純「危険もありましたけど武具も私達も強くなりましたし…」

唯「じゃああずにゃん!」

梓「はい!それじゃ本来の目的…塔にいる盗賊・カンダタを倒しに行きましょう!」

意気込みも新たにようやくシャンパーニの塔へと突入していった一行。

梓「やはり明るい進むのが楽ですね」

純「でもやっぱりのぼっていくのは辛いんだけど・・・」

唯「和ちゃん、ダメージ受けたから回復を・・・」

和にホイミをかけてもらおうよう頼む唯。

和「はい、薬草」

袋より取り出した薬草を渡す和。

梓「呪文には限りがあるんですから、薬草で我慢してください」

そんなこんなで、敵を撃退しつつ宝も取りながら上を目指し進んでいく一行。

子分「誰がやって来たぞ」

純「あれって・・・」

和「カンダタの仲間ね」

と、いきなり駆け出して上の階に行ってしまった子分達。

梓「追いましょう」

子分を追いかけて、辿り着いた最上階。

カンダタ「誰だか知らないがよくここまでこれたな・・・だが・・・」

」

と、笑みを浮かべるカンダタ。

和「！・・・みんな下がっ・・・」

カンダタ「遅い！」

その瞬間、梓達の足元の床がなくなり落ちていく四人。

唯「いたた・・・」

純「でもダメージにならない所がこの世界ですね」

梓「罠にかけるなんて・・・絶対捕まえてやるです」

梓達は急いで最上階へと舞い戻る。

しかし、すでにカンダタと子分達の姿はなくなっていた。

純「階段はここだけのはずなのに」

不思議に思っている純。

和「あっちに壁がない場所があるわ、おそらく・・・」

唯「よし！やっつけに行くぞ！」

怖いものなしの唯は、そこから下に飛び降りていった。

それに続く梓達。

カンダタ「しつこい奴等だ・・・と、よく見たら全員女か・・・」

梓「なんか嫌な視線ですけど・・・ここで倒すです！」

そして、戦闘モードに移行する両パーティー。

和「この辺りも壁がないわ。落ちないように気をつけて」

純「こう言う時は先手必勝！」

動きの素早い純が最初に仕掛けていった。

梓「唯先輩！」

唯「オッケー、あずにゃん」

カンダタ「なんなんだ・・・普通の奴らの動きじゃ・・・」

次々と子分は倒れていき、残すはカンダタのみとなった。

アッサラーム周辺でレベル上げが出来るようになったパーティーと  
はいえ、カンダタはそのモンスター達よりも強かった。

梓「純、ダメージは？」

純「あのコング達の方が攻撃は可愛いわ・・・一撃の重みはあれが上だし・・・」

和「ルカニで防御は下げているから…大きなダメージを貰う前に集中攻撃で」

カンダタを囲むように展開する梓達。

カンダタ「ぬっ…」

そして…。

和のホーリーランスの一撃を受けたカンダタは、その場に崩れるように倒れたのであった。

唯「やったよ！あずにゃん！」

大喜びして梓に抱きつく唯。

梓「この世界でもやる事は一緒ですか！って、まだ終わってません」

カンダタの前に立つ梓。

カンダタ「負けるのはともかく…女に打ち負かされるとはな…」

と、目の前に金の冠を置いたカンダタ。

カンダタ「こいつは返すぜ…また縁があれば何処かで会つかもな…」

と、いきなり起き上がったカンダタは子分と共に塔の外に飛び出していた。

純「逃がしてよかったの？」

梓「一応私達はこの冠を取り戻しに来たわけですから…とりあえずロマリアに戻りましょう」

そんな訳で、金の冠を手にもマリアの王様の元に戻ってきた梓。

しかし、その後大変な出来事が起きてしまう。

すっかり返事をしてしまった梓は、ロマリアの王女となってしまうのだ。

今までと違う状況でなおかつ一人ぼっちになり、どうしようかと悩んでいた梓。

城や街を歩いて人々の役に立つ事をやりながら、モンスター闘技場で再会した元・王様と話をしてようやく元の勇者・梓に戻る事が出来たのだ。

唯「おかえり〜あずにゃん」

宿屋で待機していた唯達は、戻ってきた梓を出迎えた。

純「でも、羨ましい…あんな格好出来るんだし」

和「零達も見なかったんじゃないかしら」

梓「あんまり見せたくないです…じゃあアリアハンに戻りましょう…」

唯「じゃあ零ちゃん達が仲間になった時にここにきてまた王女にな

ればいいんだよ」

梓「王女の話はもう終わりです！」

そう言いながらルーラを唱えて、仲間達と共にアリアハンへ戻っていった。

初めてのボス戦も難なくクリアした梓達。

そして、次なる冒険は…。

#### 目的達成

梓 Lv14 装備品：鋼の剣・鉄の鎧・鉄の盾・毛皮のフード・うさぎのしっぽ

純 Lv15 装備品：チェーンクロス・絹のローブ・うろこの盾・毛皮のフード

唯 Lv15 装備品：鉄の斧・皮の腰巻・うろこの盾・毛皮のフード・くじけぬ心

和 Lv13 装備品：ホーリーランス・鎖帷子・うろこの盾・毛皮のフード・ガーターベルト

## 第8話：エルフと眠り人達

いつもとは違う日常。

それでもいつもと同じように朝はやってくる。

紬「学校に通っていた頃からは考えられないわね」

唯「モンスターと戦ったりしないもんね」

さわ子「貴方達、今回のクエスト・・・ちゃんと確認した？」

梓「唯先輩の提案で、先に立ち寄ったノアニールの問題解決ですね」

純「みんな眠ったままになっているんですけどっけ」

漣「私達まで眠らされるとかないよな・・・」

そんなことを考える漣。

さわ子「その心配はないと思うわよ。私達は何も悪いことしてないんだし、堂々とやってきなさい」

そう言い放つさわ子。

憂「で、メンバー選出したんだけど・・・」

【目的地・ノアニールの件の解決】

出発メンバー（レベルは出発時のもの）

梓：勇者　Lv 14

唯：遊び人　Lv 15

零：魔法使い　Lv 11

紬：戦士　Lv 5

紬「憂ちゃん・・・」

そして、そんな様子を眺めていた律は何か考え事をしているようだった。

唯「今度はりっちゃんがはじかれたね」

律「ん？・・・ああ・・・ランダムだし仕方ないだろ。それよりムギが久しぶりに加入するんだからしっかりやれよ梓」

梓「言われるまでもありません！」

そして、恒例事項も済ませ一行はノアニールに再度やって来ていた。

紬「本当にみんな眠ってるわ」

梓「唯一起きていた人の話から・・・この先にある集落にエルフがいてそれが原因と」

唯「じゃあ早速・・・」

次に行く場所が決まったらゆったりしていられない唯は、すぐにノアニールを飛び出した。

そして、木々が立ち並ぶその中にその集落の入り口を見つけた梓達。

漣「モンスター・・・じゃないんだよな・・・」

唯「奥に進んでるんだけど、何か私達避けられてない？」

紬「人間が怖いとか」

梓「そう言ったことも含めて、あの奥にいるエルフに話を聞けばわかると思います」

そう言っただけを見ると、他のエルフ達とは明らかに違うエルフがいたのだった。

『何故人間がここに立ち入ったのですか？』

梓「ノアニールの人達について教えてほしいんです」

『……………』

そして、梓達は彼女から全ての事情を聞いた。

紬「少し気持ちはわかるけど・・・でも街の人をみんな眠らせるのは・・・」

漣「ここからすぐ南にある洞窟に行くんだろ・・・そこにその夢見るルビーがあるんだろ」

梓「とにかく行ってみるです」

ノアニールの人達を助ける為に、洞窟へと突入する梓達。

紬「私と梓ちゃん、で道を切り開くわ」

唯「さすがムギちゃん、パワーファイターだね」

梓（…ムギ先輩に斧装備って…最強なんじゃ…）

ふと、そう思ってしまった梓。

やはり、最初のころのダンジョンとは違い階層数が多くより体力・精神力の消費が激しかった。

唯「漣ちゃん、大丈夫？」

漣「梓やムギが何とか敵を倒してくれてるから、私の負担も減って…」

唯「でも、この洞窟に流れる水って綺麗だね」

梓「そう言えばさっき見つけた泉の水で回復しましたしね」

そう言う梓。

そして、次の階層に降り立った梓達は雰囲気の違いに気付いていた。

漣「何かいるのか？」

ちょっと怯えながらそう言う漣。

梓「違います…あそこ…水辺の所に宝箱が…」

唯「よし、私があけてみるよ」

怖いもの知らずの唯が勢いよく宝箱を開けた。

紬「宝石…って、これが夢見るルビー？」

漣「唯、一緒に何か紙が入ってるぞ」

漣に言われて一緒に入っていた紙を取り出した唯。

唯「あ、あずにゃん…」

梓「どうしたんですか…この紙に何が書かれて…」

唯から受け取った紙を見てみる梓。

梓「…エルフの所に戻りましょう…今すぐに」

漣「ああ、リIMIT使っぞ」

漣のリIMITですぐさま洞窟から脱出する梓達。

『これは…夢見るルビー…それにこの手紙は…』

梓「私達はただの冒険者ですからエルフ達の事について深くかわる事はしません」

『…私は少し厳し過ぎたのかもしれませんが…それと』

梓「？」

『貴方達はこの世界のものではありませんね…何か違う雰囲気を感じます…』と、貴方達の事情を知ったとしても私には関係ないのでしたね…』

そう言うとき梓は彼女から目覚めの粉を受け取った。

澪「あ、ありがとうございます」

そして、足早にエルフの集落を後にしてノアニールに戻った梓は目覚めの粉を使用。

すると、粉は風に乗って街中に広がっていった。

細「街の人達が動き出した…」

唯「ようやく起きたんだね」

澪「じゃあここから情報収集だな」

改めてノアニールで探索を開始する梓達。

梓「オルテガ…って、確か私…じゃなくて私と入れ替わった本来の勇者のお父さんなんだよね…でも、それって結構前の話だから…そんな前から街の人達は眠らされて…」

梓自身はオルテガの事など知るわけではないのだが、勇者と入れ替わっているからなのか奥底にオルテガに関する記憶がある気がしていた梓。

唯「でも、これで一件落着だね…ムギちゃんも強くなったしね」

紬（そうだけど…憂ちゃんの事何とかしてあげないといけないし…）

そう考える紬。

梓「それじゃっ、ルーラですっ」

勢いよくアリアハンに帰ってきた梓達。

唯「あれ…ルイードさんの酒場の雰囲気になんか変な…」

純「あっ、漣…先輩…」

漣「一体…何が…」

漣がそう尋ねた時、椅子に座っていた律が突然立ち上がったのであった。

### 目的達成

梓 LV15 装備品：鉄の斧・鉄の鎧・鉄の盾・鉄兜・うさぎのしっぽ

紬 LV13 装備品：鉄の斧・鉄の鎧・鉄の盾・鉄兜

唯 LV17 装備品：鉄の斧・皮の腰巻・うろこの盾・毛皮のフード・くじけぬ心

漣 LV14 装備品：ブーメラン・マジカルスカート・お鍋のフタ・毛皮のフード・銀のロザリオ

## 第9話：緊急企画！（前書き）

どうしようもなかったのでやる事にしました

## 第9話：緊急企画！

唯「どうしたの！？りっちゃん！」

驚きの表情を見せる唯。

憂「あの、律さん…別に私の事なら」

律「けいおん部の部長権限で緊急企画を発動させる！..」

いきなりそう言い放った律。

唯「さ…さわちゃん…」

さわ子「私は何もアドバイスとかしてないわよ…」

和「律が自分でそう決めたのよ」

そう説明する和。

漣「おい律！また勝手に…」

律「漣は憂ちゃんをこのままにしていいいと思っているのか！」

唯「えっ、憂？」

律にそう言われて、憂の方を見る唯。

憂「えっと…」

紬「それでりっちゃん、緊急企画って…」

律「ルール上ランダムで選ばれたメンバーが次の目的をこなしていく…そうだろ？」

漣「そうだよ、だから…」

律「でも、このままだと憂ちゃんが可哀想だろ。だから次は先に進まずに緊急企画としてレベル上げを目的として梓に人選してもらってやろうと」

梓「私が選ぶんですか？」

そう質問する梓だが、自分が勇者だと思い勝手に了承した。

そして、みんなの視線が梓に集まっていた。

梓「えっと…律先輩の好意を受け取ってまず憂を…」

憂「何だかみんなに迷惑かけてるみたいで…」

唯「残り二人は…」

期待する眼差しで梓を見る唯。

梓「レベル上げが目的ならレベルの低い律先輩…」

律「あたしなら別に選ばなくても…」

梓「律先輩が私に人選を任せたんですよ。逃がしはしないです」

純「逃がしはしないって…梓…」

唯「じゃあ、最後の一人は…」

また全員の視線が梓に集まる。

梓（レベルを考えれば低めのムギ先輩か和先輩…能力的な事も考えると…）

そして、梓が選んだ最後の一人は…。

【目的地・特になし（しいて言えば商人・憂のレベル上げ）】

出発メンバー（レベルは出発時のもの）

梓：勇者   LV15

和：僧侶   LV13

律：武闘家   LV10

憂：商人   LV1

唯「…私がない…」

憂「お姉ちゃん…」

純「私も結構パーティーに加わってレベル上がってるからな…」

和「私でよかったの？」

梓「はい、ムギ先輩には申し訳ないと思ったのですが…」

紬「梓ちゃん気にしないで。梓ちゃんが勇者なんだからやりたいようにでいいんだから」

微笑みながらそう言う紬。

そんなわけで、ロマリアよりスタートすることにした一行。

律「ロマリアで憂ちゃんは大丈夫なのか？」

そう聞く律。

梓「多少装備で強化されていますけど、最初のうちは防御してもらうしか・・・私と和先輩の呪文で出来る限り早く戦闘を終わらせますから」

律「レベルは低くてもあたしだっているんだからな」

張り合うようにそう叫ぶ律。

憂「初めての冒険・・・」

律「何でも出来る憂ちゃんも、冒険は緊張するよな」

憂「梓ちゃんもそうだったの？」

梓「私は・・・はじめは一人だったから寂しいのがあったかな・・・」

律「そうだよな」それであたし達が巻き込まれたんだしな」

梓「むっ・・・律先輩、何気にまだ根に持ってますね」

憂「今までもこんな感じだったんですね」

和「部室にいても冒険に出てても、唯達は変わらないわよ」

そう告げる和。

それからレベル上げを続けていく一行。

律「しかし何だな…いつのまにか憂ちゃんが相当強くなってってるような…」

そう呟く律。

梓「何気に装備できる物も多いから…律先輩の防御力をあっさり上回りましたし」

憂「えへへ…」

和「でも、これで一段落かしら…次の目的地…油断できない場所だから」

梓「中には入ってないですけど…外からは見ました…ピラミッドですね」

律「カンダタ戦に次いで二つ目の難関か？」

和「目的としては二つ目の鍵を手に入れること…いつものように連携していけば大丈夫なはずよ」

梓「和先輩がいてくれると一番安心できるんですけどね」

律「私も先輩なのに何だろうか…この扱いの差は」

憂「私は頼りにしてますよ」

律「憂ちゃんは、ええ子や〜」

梓「そろそろ良いレベルですね。早く戻らないと唯先輩が泣いてるかもしれない」

憂・和「……」

そして、一行はアリアハンへと直行…したのだが…。

唯「憂〜！」

帰ってくるなり憂に抱きついてきた唯。

紬「あらあら…」

澪「姉の威厳はやっぱり無しだな」

やっぱりという表情をしている梓・和・律。

憂「ごめんねお姉ちゃん、心配かけちゃって」

唯「ううん、大丈夫。これで憂だって強くなったんだもん…いつでも一緒に行けるよ」

憂「うん！」

笑顔でそう返事する憂。

さわ子「憂ちゃんが旅に出るたびにそうしてたら、身が持たないわよ…さてと…」

と、真剣な表情になるさわ子。

紬「次のダンジョン…」

漣「ああ…」

さわ子「ピラミッドは仕掛けも多くてみんなには大変なクエストになると思うけど…」

梓「やってやるです！憂や純、先輩達がいいますから必ず乗り越えられます」

さわ子「その意気よ、梓ちゃん」

唯「そうだねあずにゃん。私も張り切っていくよ」

和「それじゃ早めに休みましょう。また明日から大変なんだから」

明日以降に挑戦するピラミッド攻略。

もちろんあんな事を言った梓自身も、全く不安がないわけではなかった。

それでも今はゆっくりできる時間を大事にして、その身体を休めるメンバーたちなのであった。

#### 目的達成

梓 LV16 装備品：鉄の斧・鉄の鎧・鉄の盾・鉄兜・うさぎのしっぽ

憂 LV13 装備品：鉄の斧・鉄の鎧・鉄の盾・毛皮のフード・うさぎのしっぽ

和 LV15 装備品：ホーリーランス・みかわしの服・うろこの盾・鉄兜・ガーターベルト

律 LV13 装備品：鉄の爪・みかわしの服・おなべのフタ

## 第9話：緊急企画！（後書き）

これで全員が平均レベル14ぐらいになりました  
ピラミッド攻略にはまだレベル上げないといけません  
出来る限り実際に攻略して、書きあげていきたいと思っ  
ています

## 第10話：聖邪交わるピラミッド

梓「…ついにここまで追い付きましたね」

ルイーダの酒場で休んでいた梓がいきなりそんな事を言った。

唯「どう言つこと？」

漣「唯の提案で先走ってイシスまでやってきたけど、ようやく本来の目的としてイシスにやってこれた…って事だよな梓」

梓「漣先輩のおっしゃる通りです」

紬「街と城の探索は終わってるから…」

さわ子「何度も言わせないでよね。次のダンジョンは大変よ」

唯「大丈夫だよさわちゃん。私とあずにゃんがいれば…」

梓「遊び人の唯先輩がいると色々苦労するので…」

律「この世界に来て梓の唯に対する態度がきつくなってるんじゃないか？」

そして、いつものごとく開始されるランダム選考。

### 【目的地・ピラミッド攻略】

出発メンバー（レベルは出発時のもの）

梓：勇者   LV16

純：盗賊   LV15

紬：戦士 L V 1 3

漣：魔法使い L V 1 4

唯「私が…」

梓「和先輩がいないのが少し辛い気しますが…攻撃能力的には問題ありませんね」

漣「あの緑のカニは呪文の方がいいしな」

純「何か私だけ戦力的に置いてかれているような…」

梓「ダンジョンで長期戦になるかもしれませんから、しっかりと準備していきましょう」

純「私の心配はスルー!？」

そんなこんなで出発していく梓一行。

漣「レベルアップして新しい呪文を覚えた」

純「私のスキルって役に立つの?」

紬「えつと説明によると…忍び足は使えるんじゃないかしら?敵と会いにくくなるし」

そう告げる紬。

梓「大丈夫だよ純。純だって役に立ってるから」

純「梓…」

四人の力を合わせ、強くなりピラミッドへと突入を開始した。

漣「いきなりの展開だな」

梓「毎回同じ出しコントみたいな感じですからね…」

ちよつと溜め息を出しながらそう言う梓。

紬「仕掛けもあるみたいだから気合を入れて…」

純「ちゃんと忍び足でね」

そして、前半は忍び足の効果もあったのか全く敵も出ず落とし穴も回避して問題の階層へやってきた。

紬「ここで梓ちゃんの特技の出番よ」

梓「えつと…この思い出す…ですよね」

梓は頭の中に刻んだ話を思い出してみた。

そして仲間達の協力の元、四つのスイッチを順番に押して見事仕掛けを解くことに成功したのだった。

梓「みなさん、ありがとうございます」

紬「さあ、奥へ進んでみましょう」

先程まで閉ざされていた部屋の先へと向かう一行。

純「よし、盗賊として一番乗りで…」

純が宝箱を開くとそこにはこの世界で二つ目の鍵となる魔法の鍵が入っていたのだった。

梓「えっと、目標的にはこれでオツケーのかな？」

漣「一応まだ上に向かう階段はあったけど…梓の判断で決めよう」

梓「漣先輩…分かりました…まだ何かあるかもしれませんが、体力も精神力も余裕ありますから行ってみましょう」

そう決め、四人はさらに上の階層へと進んでいった。

梓「うつ…辺りに棺が…」

漣「……」

梓の言葉に固まる漣。

紬「漣ちゃん、ここで固まっていると危険よ」

純「って、確かに棺は怖いかもしれませんが…あれですよあれ！」

と、純が示した先にはずらりと並んだ宝箱であった。

梓「明らかに罠っぽいんだけど…」

漚「…梓…任せる」

とりあえずそれだけ伝えた漚。

梓「それじゃ…って、純!？」

と、すでに純が一番近くの宝箱に手をかけていた。

そして、宝箱が開かれる。

すると、不気味な声と共にモンスター・ミイラ男が出現したのだった。

紬「梓ちゃん!」

すぐさま戦線に参加し、武器を振るう紬。

紬の言葉に押される形で、参戦する梓。

純「盗賊の血の影響か…宝箱を開けずには…」

梓「って…」

そして、純が宝箱を開ける度にミイラ男が出現し辺りは混乱した戦場となり始めていた。

紬「この数…私達だけじゃ対処しきれない…」

梓「私も攻撃呪文あるけど…回復用に残しておきたいし…あとは…」

純「漣…先輩…」

と、このエリアの隅にじっと立っていた漣。

そして、そんな漣にもミイラ男は襲いかかってきた。

梓「漣先輩…！」

漣「そうだ…全て…全てを…」

と、漣の掌に熱いエネルギーが集約されていく。

紬「梓ちゃん、純ちゃん、伏せて！」

そして、三人が伏せると同時に

漣「ベギラマ！」

ギラよりもさらに強力な閃熱呪文が、ミイラ男を撃破していく。

純「凄い…」

凄すぎて言葉に出来ない純。

紬「その調子よ漣ちゃん！」

そして、漣の後方からの援護を受けて前線で戦う三人の若者達。

純「すみませんでした…」

大量のミイラ男達との戦いの後、反省させられている純。

紬「でも、畏はなかったし色々手に入ったから良かったわ」

梓「漣先輩、精神力の方は大丈夫ですか？」

漣「何とか…でも、もう怖くないし…先を急ごう」

そして、さらに上を目指す一行。

純「頂上だね…」

紬「宝箱もなさそうだし…これで探索はおしまいかしら」

と、そんな時梓は奥の方に光る何かを見つけた。

梓「これ…アリアハンの街の井戸の中にいる人が集めてる小さなメダル」

漣「本当に色んな所に落ちてるんだな…」

紬「結構順調にピラミッドクリアできたわね」

純「例によつてお約束の帰還方法が用意されてるみたいだよ、梓」

梓「じゃあ…」

勢いよく外へ飛び出す四人。

漣「相変わらず、よく無事に飛び降りれるよな…」

外からピラミッドを眺めながらそう言う漣。

紬「で、鍵を手に入れたわけなんだけど・・・これからどうするの？」

純「それってこの鍵を使つての探索を、私達か次の人達かつて事？」

梓「次の人達に迷惑はかけられませんから、私達で探索しちゃいましょう」

そう決めた梓達は、イシスで一休みした後手始めにイシスの探索をスタートした。

そして・・・。

紬「お城にお宝があるって話は聞いてたけど・・・」

純「これが噂のほしふる腕輪！」

漣「装備すると素早さが二倍か・・・」

とりあえず全員的能力値を確かめてみる梓。

梓「純が装備したら数値が驚異的だね」

紬「でも、私と漣ちゃんは元の数値が低いから装備してもあまり・・・」

純「じゃあ、梓で決まりだね」

梓「いいの？」

純にそう聞いた梓。

純「一人の数値を伸ばしすぎるより、みんなを強化していった方がいいじゃん」

そんなわけでほしふる腕輪は梓が装備することになった。

それから各地にルーラで飛び、魔法の鍵で行けるところを探索する一行。

そして、最後にアリアハンを探索しルイーダの酒場に戻っていったのだった。

#### 目的達成

梓 Lv19 装備品：鉄の斧・鉄の鎧・鉄の盾・鉄兜・ほしふる腕輪

純 Lv18 装備品：チェーンクロス・黒装束・うるこの盾・毛皮のフード・ごうけつの腕輪

紬 Lv17 装備品：鉄の斧・鉄の鎧・鉄の盾・鉄兜・うさぎのしっぽ

澪 Lv17 装備品：ルーンスタッフ・マジカルスカート・おなべのフタ・毛皮のフード・銀のロザリオ

## 第11話：梓の運だめし（前書き）

久しぶりの更新となっていました。

出来る限り早く更新したいと思いますが…見守っていてください

## 第11話：梓の運だめし

梓「まず、とりあえずは…」

何故かルイーダの酒場にてティータイムに入っていた梓達。

さわ子「ピラミッド攻略したわけだしね、今回は特別よ」

そう言いながらさわ子もお菓子を頂いていた。

漣「楽しむのもいいけど次は未知のエリアなんだぞ」

紬「そうね、事前に探索してきたイシスとは違うわけだし…モンスターも強力になっているはず」

純「でも、唯先輩は相変わらず【今】を楽しんでいますけど…」

唯「やっぱりティータイムはいいよね」

しかし、そんな楽しい一時も長く続けられるわけでもなく…。

さわ子「さて、気分を切り替えてメンバー選ぶわよ」

梓（といいつつまだ手にお菓子とティーカップ持つてる先生に誰もツッコミを入れないとは…）

### 【目的地・ポルトガ】

出発メンバー（レベルは出発時のもの）

梓：勇者 LV19

律：武闘家　Lv13

紬：戦士　Lv17

漣：魔法使い　Lv17

憂「前回のから純ちゃんと律さんが入れ替わっただけだね」

梓「それじゃいつものように準備して…」

さわ子「ちよつと待って」

と、いきなり梓達を引きとめるさわ子。

紬「どうしたんですか？」

さわ子「実は…道具袋の中にすぐろく券が8枚あります」

梓「って、袋を漁らないでください」

さわ子「そこでビッグチャンス勇者である梓ちゃんに与えるわ」

そう言い放ったさわ子。

律「何なんだよ、ビッグチャンスって」

さわ子「アッサラムの南西にある二つ目のすぐろく場。そこで梓ちゃんにチャレンジしてもらおうの」

梓「すぐろく場であまり良い思い出がないんですが…」

さわ子「この8枚の券がなくなる前にクリアしたら…次のダンジヨ

ン攻略の時に一人だけ好きな人を選べる権利を与えるわ」

和「二つ目のすぐろく場……」

梓「通りかかった時に下見はしてきましたけど……やはり難しいですよ」

紬「でも、次のダンジョンで仲間を自分で一人選べるって報酬は大きいと思う」

律「そうだな、和とかいてくれたら回復楽だしな」

各々そんな話をしているころ、さわ子の提案に対して考えている梓

梓「わかりました。寄り道することになりますけど……やってみます」

そんなこんなで、梓は二つ目のすぐろく場のクリアという追加ミッションを受けることになったのだった。

漣「まあ、すぐろく場の件もあるけど律のレベルも低いからついでに上げていこう」

律「お手数をおかけします」

レベルを上げた後、すぐろく場へと乗り込んでいった梓一行。

律「よし、部長のあたしが見守っているからな」

紬「頑張ってね梓ちゃん」

漣「負けるなよ、梓」

梓「ありがとうございます、先輩方…行ってきます」

意気込みも良くすごろくへ挑んでいった梓。

律「で、どうなるかな…」

漣「一番のポイントは中央にある旅の扉…あれに入らないとゴールのあるあのストレートの道に行けない…」

紬「すごろくだから運が必要になるんだけど…」

すごろくは一人でしか挑めないため、戦闘もかなりの負担となる。

梓「ええっ、ただのミイラ男とマミーだけだったのに腐った死体とか現れた…って、強いし!？」

慌てながらも数回攻撃を与え、何とか腐った死体と撃破するものの体力は半分ほどに減らされていた。

梓（ここは落ち着いて、長い道のりなんだから…）

梓はこの中で一番弱いミイラ男を一体残しておき、すごろくを始めの前に袋から出しておいた薬草を二つほど使用した。

梓「フルに回復は出来なかったけど、これで…」

律「よし、もうすぐ旅の扉の所だ…」

漣「梓…」

一つ目のすぐろく場では最終的にクリアはしたものの、自慢にもならないほどの出来であった。

だが…今回は誰も予想できない結果が待っていた。

梓「もうサイコロ一つで旅の扉に到達できる圏内…行きます!」

気合を入れ放ったサイコロ…その出目は旅の扉にちょうど止まれる目であった。

律・紬・漣「!!」

梓「やった!」

旅の扉を通り中央の道へやってきた梓。

梓「よし!」

と、サイコロを振る梓…であったが

梓「ふぎやつ!?!」

電流が梓を襲い一気にダメージを受けてしまった。

梓「この道…落とし穴はないけど…もしかして電流でダメージ受けすぎてリタイヤする流れ!?!」

律「そうみたいだな…道中じゃ回復できないからさっきの戦闘中に

やるか運よく止まったマスで回復なんだろうけど…」

紬「さつき完全回復してないから、今の体力で同じだけダメージを受ける」とその後二回受けたら倒れちゃうわ」

梓を心配する紬。

梓「でも、諦めません。報酬がどうこうより、前回の汚名を返上してやるです!!」

空高く投げられたサイコロ。

そして、梓を含めて転がるサイコロの目に集中するメンバー。

澪「あの出目って…」

律「まさか梓の奴…」

梓「へっ…ゴール…」

出た目はゴールへ辿りつけられる目。

意外な展開に当の梓も茫然となっていた。

梓「はっ!?!…って、茫然としている場合じゃありません」

急いでゴール内へ駆け込んでいった梓は置かれている宝箱を開いた。

梓「小さなメダルとモーニングスターか…とりあえずみんなと合流しましょう」

隅に作られている落とし穴から律達と合流した梓。

漣「やったな梓」

律「色々楽しい展開を予想してたのに、まさか一発クリアなんてな」

梓「どんな展開を想像してたんですか!？」

紬「すぐろく場もクリアしたわけだし、本来の目的に戻りましょう」

梓「はい!ポルトガへ向けて出発するです」

すぐろく場一発クリアの勢いをそのままにして、梓達は目的地・ポルトガに向けて再出発していくのであった。

## 第11話：梓の運だめし（後書き）

上手くクリア出来たのに、何だかすみませんな気分です。  
自分でも一発クリアするとは思わず…。

また次のすぐろく場発見したら、このイベント再発させると思いま  
す…多分  
では、

## 第12話：扉のその先へ…

律「唯達も心配してるだろうから一度アリアハンに戻ろうぜ、冒険の書をつけるついでにさ」

漣「戻った方がいいのか？」

梓「私的には少し自慢したいとか…いえ、決してそんな思いが強いわけじゃ…」

少し慌てふためいている梓。

紬「ふふつ、じゃあ戻りましょうか」

と、言うわけでアリアハンへと戻る梓一行。

唯「あれ？あずにゃん達帰って来たよ」

純「まさか、梓…一度も成功出来ずに…」

憂「お帰り梓ちゃん」

さわ子「その様子だと…成功したみたいね」

漣「凄かったんだぞ、一回ですごくクリアしたんだ」

唯「さすがあずにゃんだね」

律「セーブしたら再出発するから…と…」

奥にいるシスターの所でセーブをする梓達。

そして、仲間達が見送る中ルーラでアッサラムへと飛んで行った梓達。

紬「えつとアッサラムからロマリア方面に戻った西に祠があつて、その先の扉…魔法の鍵で開く扉を抜けるとポルトガにたどり着くわ」

梓「それじゃ行きましょう」

道を確認しながら歩みを進めていく一行。

当然のごとく魔物も出てくるのだが、今の一行の足を止めるほどにはならなかった。

梓「律先輩、澪先輩。傷の手当てを・・・」

和がいないため梓がホイミで仲間の治療を行っていく。

そんな様子をニコニコ笑顔で見ている紬。

律「流石に防御低いと辛いな」

澪「後ろにいるから攻撃されにくいけど、来ない訳じゃないからな」

紬「でも今日はゆっくり休めそうよ。ほら！」

紬が示した方角に、ポルトガの街が見えていた。

律「意外と簡単だったな・・・」

漣「後々そうも言ってもらえなくなりそうだけだな」

そんなこんなで、結構あっさりとポルトガに辿り着いた一行。

街を探索後、城にて情報を得ていた。

律「情報を得た通り、船を手に入れる目処がたった」

そう言い放つ律。

梓「でも、そのためには【くろこしゅう】を持ってこないといけませんけどね」

紬「この手紙を見せれば山を越えた先に行けるようになるから...とりあえず私達の冒険はここで終わりね」

そう告げる紬であるが、何やら不満げな律。

漣「どうした？律」

律「どうせならさ一度行ってみようぜ」

梓「律先輩、唯先輩みたいなこと言わないでください」

律「もちろん次のメンバーの邪魔はしないさ。やっぱり私達も冒険者だからさ...それに...」

紬「私も興味はあるわ。それに到着した街の探索とかなければ次

の人達のクエストの邪魔にはならないんじゃないかしら」

紬の発言に梓と漣は互いに顔を見合わせた。

漣「まあ、律のレベルがまだ低いからレベル上げはしておきたいけど…あまり先に行きすぎると危険だぞ」

律「そうなたら大人しく引き上げるさ…どうだ？梓」

梓「勇者の役目も大変です…分かりました。この先の街の探索は無しという条件で先に進みましょう」

漣「まあ、これが私達らしい事だよな」

と、言うわけであつて唯が提案したのと同じく先の街へ向かう事にした一行。

律「ぐはっ…」

梓「律先輩！」

紬「りっちゃん！」

突然律に攻撃を加えた紬。

漣「あのげんじゅつしの呪文の影響だ。すぐにこの戦闘を終わらせれば」

漣のサポートのおかげで何とか魔物を撃破出来た一行。

梓「ハイ、ホイミです。でも、さすがムギ先輩ですね。パワーのある一撃が…」

律「まだいけるさ…」

漣「出てきた魔物の倒す順番も考えて、出来る限りリスクを少なく…」

梓「さすが漣先輩ですね…」

しかしながら、当然先へ進むにあたって新たな魔物が一行の前に立ちふさがった。

紬「データによるとあの魔物はマッドオックス…」

梓「とりあえず私が行きます。アストロン！」

梓が呪文を唱えると、梓達は鉄の塊に変化した。

律「おゝ、攻撃を受けてもびくともしないな」

漣「こっちからも攻撃できないんだけどな…だけどこれはこれで…」

マッドオックスの打撃攻撃や、ギラの呪文を防ぐ鉄となった梓達。

梓「相手の攻撃方法も判りましたし…反撃開始です！」

マッドオックス撃破後、北にあるお城に駆けこんだ梓達。

漣「梓…何かここ変な雰囲気じゃないか？」

紬「そうね…って、りっちゃんの姿が見えないけど…」

律「探索はしてないけどここが何処がわかったぞ、ここが情報にあったダーマだ」

梓「律先輩の提案で大変な所まで来ちゃいましたね、ここって重要な場所ですよ」

漣「ここに来るにはまだ早いんだ…律…」

律「わかってるって…アリアハンへ戻ろう…また次のメンバーに選ばれればバハラタにも行けるんだ」

そして、一行はルーラにて再びアリアハンへと戻っていった。

さわ子「事情は分かりました。ずいぶん遅いから心配したわよ」

唯「りっちゃんも私と同じ事考えたんだね」

梓「付き合わされる方は大変なんですからね…と、バハラタの探索はしてませんから次のメンバーで行います」

さわ子「それじゃ今日はゆっくり休みなさい」

そして、梓達は長旅の疲れを癒しつつ次の目標を考え眠りにつくのであった。

## 目的達成

梓 LV20 装備品：鋼の鞭・鉄の鎧・鉄の盾・鉄兜・ほしふ

る腕輪

紬 LV18 装備品：鉄の斧・鉄の鎧・鉄の盾・鉄兜・うさぎのしっぽ

律 LV15 装備品：鉄の爪・黒装束・おなべのフタ

澪 LV18 装備品：ルーンスタッフ・マジカルスカート・おなべのフタ・毛皮のフード・銀のロザリオ

## 第12話：扉のその先へ…（後書き）

毎度の閲覧ありがとうございます。

しかしながら、やはり先走り始めてますね…。

先が気になって無茶して進んだ結果、死にかけたり…。

船を手に入れたら先走り暴走しそうです。

では、

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7345w/>

---

ドラクエティータイム

2011年11月30日22時50分発行